

アートな超時空マップ

細やかな曲線が無数に波打つ山なみ。それとは対照的に、直線が交錯する幾何学模様。弁柄色に燃えて屹立する両者の間の緊張をよそに、藍色の川筋が伸びやかに、ときにセクシーにたゆたう。

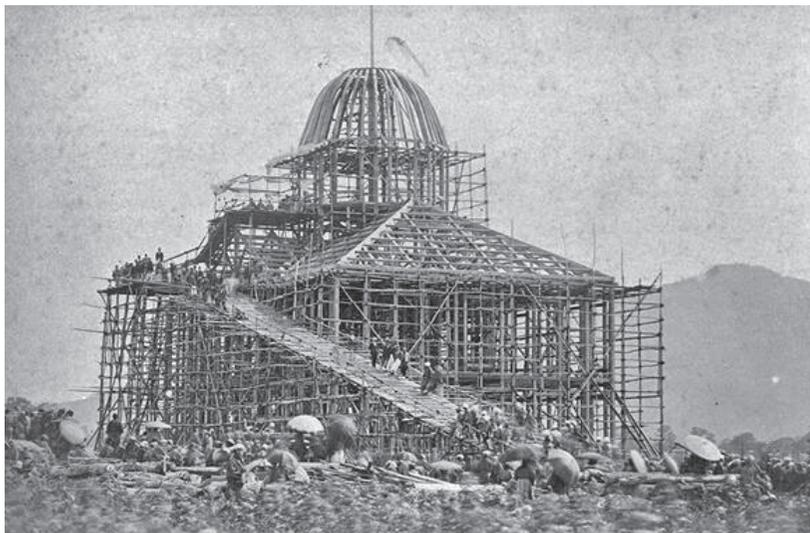
横四十八センチ、縦三十二センチ。キャンバスの六号（F6）とほぼ同じサイズの木版画で、「地形見取図」の標題が付いているように、厳密には地図とは言えないかも知れません。むしろ第一印象はシュール（超現実）なアートであり、まるで落書きのように空白を「歌」で埋めるところなどは、ポップな味付けさえ感じさせます。

しかも、この地図を子細に見ていくと、いくつものナゾが浮かび上がってきます。

絵師・長善を地図掛に登用、一カ月後には刊行

第一のナゾにして最大の疑問は、このシュールでポップな「見取図」は一体どんな目的で作られたのか。謎解きのカギは、まず作者にあるようです。

年）が銭函に開拓使仮役所を置き、札幌本府の計画に着手したのが、明治二（一八六九）年。明治五（一八七二）年には本庁舎建築に着手し、この間に見取図にも記されている圓山（円山）、琴似、手稲、初覚（発寒）村などの募移民集落が少しずつ形成されていきました。この年、丸井今井百貨店の創業者・今井藤七（一八四九〜一九二五年）が、商都札幌の将来を見越



開拓使札幌本庁の上棟式（明治6年・北大附属図書館北方資料室所蔵）

して函館から札幌に拠点を移し、創成川沿いに小間物屋を開業しています。格子状に区画割りされた現在の札幌の中心街はと言うと、通りに一つ一つ名前が付され、見取図の上では「都市」の風情を感じさせます。しかし、実際に

右隅の落款から作者は、円山四条派の流れを汲む絵師・船越長善（一八三〇〜一八八一年）。南部藩の蝦夷地警護や新田奉行、岩手県検地御用掛などを務め、明治五（一八七二）年に退職後、北海道に渡ったとされています。ここで新たに生じる疑問は、札幌に着いたのが八月で、翌年三月には早くも見取図が刊行されていることです。

長善の経歴を見ると、刊行直前の二月に地図掛として北海道開拓使に採用されています。また、「新撰北海道史」には、長善が「三月計画された市街地図をつくり」見取図を刊行したとあるように、この見取図は開拓使の命によって発行されたことは間違いなさそうです。

となると、長善は、任用からの一か月あるいは札幌に着いてからとしてもわずか半年余りの間に、作業を進めたことになり「札幌圭一彫」とあるので札幌の彫り師を使ったようですが、木版となれば下絵を起こしてから「彫り」、「刷り」と手間の掛かる工程を経なければならず、かなり「急ごしらえ」であつたようにも思われます。

そう考えて見取図を改めてながめると、色を重ねる過程で生じたと思われる微妙な刷りのズレが見られます。さらに、長善が開拓使から「急ごしらえ」を強いられていたと仮定すると、シュールでポップな作品の背景が少しばかり見えてきます。

古地図の散歩道だから許される大胆な推理を立てる前に、当時の札幌の状況を概観してみましょう。

「北海道開拓の父」と呼ばれる島義勇（一八二二〜一八七四年開設）も「官設」のものでした。は、偉容を見せ始めた開拓使本庁がひととき目立つほかは、役所関連の建物が散在する程度で、周辺には広大な原野が広がっていました。数千人とされる在留者の大半は、本府建設のために集められた職人らで、彼らのための旅館も薄野遊郭（明治四年開設）も「官設」のものでした。

原始の曠野に屹立する「未来都市」

このような札幌の「発展前夜」とも言うべき時代状況から類推すると、見取図に描かれているのは、都市としての実はまだ伴っていないが、その大いなる可能性を内に抱いた「未来図」のように見えてきます。

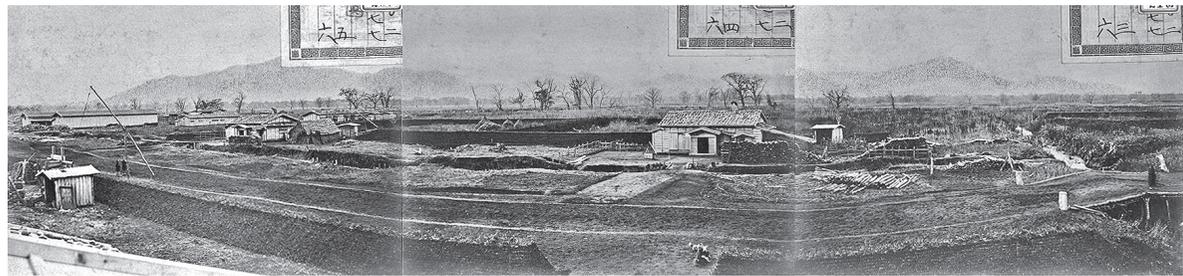
判官 長善、見取図はできたか？

長善 何をどう描いて良いものやら、正直戸惑っております。

判官 お主の得意な風景画に計画図を重ねれば良いのじゃ。とにかく立派に勇躍する様をな。

長善 ……

想像するに、長善はそんなやり取りの末、市街地の殺風景な写生はあきらめて、計画図を中央に配することにした。しかし、ただ貼り付けるのでは、絵師としてのプライドが許さない。そこで、手稲山から藻岩山に至る山なみを立体的に表現する一方、平面図の都市計画図をまるでビルがそびえるように描き、濃い弁柄色で浮き立たせた。



札幌草創期の市街地のパノラマ写真、左手から藻岩、円山、三角、手稲山などがうっすらと見える



石狩国札幌本通ヨリ西ヲ望ム図 (明治4年9月・北大附属図書館北方資料室所蔵)

川からは幾筋もの枝川が伸びている中で、北方に一直線に伸びる水路が目につきます。名称は記されていませんが、慶応二(一八六六)年に江戸幕府の役人・大友亀太郎(一八三四〜一八九七年)が開削した大友堀(成川)にほかなりません。川沿いに「送漕局」「御蔵地」の記載があり、水運が活発に行われていたことをう

呼ばれるように、東本願寺の資金で明治四(一八七一)年に開削されたものです。その東本願寺の名は現在地(南七西八、真宗大谷派札幌別院)近くに記されており、門前から南に伸びる道には「石切街道」と書き添えられています。「石切」の名の通り、定山溪寄りの硬石山から切り出した札幌硬石を運ぶための産業道路で、道筋を真っ直ぐに北にたどると本庁建設地に突き当たります。

伸びる道路網、水の恵みを象徴

一方、水路に目を向けると、豊平川からは幾筋もの枝川が伸びている中で、北方に一直線に伸びる水路が目につきます。名称は記されていませんが、慶応二(一八六六)年に江戸幕府の役人・大友亀太郎(一八三四〜一八九七年)が開削した大友堀(成川)にほかなりません。川沿いに「送漕局」「御蔵地」の記載があり、水運が活発に行われていたことをう

かがわせます。豊平川沿いの地名がわずかなのに対して、現在の新川水系に当たる琴似川、琴似発寒川については、支流一つ一つにアイヌ語由来と見られる名前が付されています。手稲、発寒、琴似村などが本府建設に先駆けて開けていったのは、これらの川筋が水運に活用されたことと、農業適地と目されたからと推測できそうです。

南3条から北6条の間の大友堀(明治4年)



(北大附属図書館北方資料室所蔵)

そう解釈すると、この見取図は、

人跡を阻む蝦夷地の厳しい自然に対し、人間の叡智が果敢に挑みかかる様を象徴的に描いた、優れたアートにも見えてきませんか。もともと、開拓使は「見取図」という題からして芸術作品を長善に求めたわけではなかったでしょうから、あの判官は「伸びゆく札幌のイメージ図」として「でかしたぞ」とほめたかも知れません。

札幌地形見取図は、アートとしてまたイメージ図としての一面だけでなく、地図としての役割も持たされていたと思われます。

まず目に付くのは、屏風のように連なる山の一つ一つの名前です。全体としては、ちょうど札幌のテレビ塔の展望台から西方を眺めたようにリアルに描かれ、名前が付されているのは、旅の街道筋から目標になる山々です。北から南へ長峰(手稲山)、圓山、初覚山、最岩、金牛山、陰柯山とあります。

円山は三角山？藻岩も玉突き移動！

ここで、ちょっとしたナゾに突き当たります。

札幌神社(明治四年創建・現在の北海道神宮)のなぜか右(北)に圓山があり、圓山村の背後の最岩は藻岩山にしては小ぶり、形は南端の陰柯山の方が藻岩山に酷似しているではありませんか。現在の地図・山名と一致するのは、金牛(ケネウシ)山だけです。

結論から言うと、見取図の「圓山」は現在の三角山、「最岩」は円山、「陰柯山」は藻岩山となるのだそうです。「北海道蝦夷語地名解(明治二十四年)」には、モイワは「札幌神社の小山なり。和人之を円山と称し、却って『インガルシベ』を『モイワ』と呼ぶは最も誤る」と記録されています。

「円」が「三角」に変わったのは驚きですが、順送りです。三つの山の名前が変更されたことになります。

地図としての生命線である道路はどうでしょうか。山裾を南北に一直線に伸びるのは札幌越新道(銭函〜千歳、一八五七年開削)と見られ、手稲、琴似村を経由して、圓山村で東に折れて渡島通(現在の南一条通)につながります。銭函と手稲間の追分から東寄りに迂回すると初覚(発寒)村に入り、その先の琴似村で新道に再び出合います。

本府から東方向へは篠路道、南方向へは有珠新道(街道)の名が見えます。有珠新道(札幌〜尾去別)は、本願寺道路とも

「見取図」刊行の前年の九月、開拓使は北海道土地売買規則・地所規則を制定するとともに、勸農規則を定めて移民団体・集落の維持を図ろうとします。

刊行の年の六月には、開拓使東京出張所に屯田課が設置され、永山武四郎（一八三七〜一九〇四年）らが配属されています。永山らの建言を受けて十二月には、開拓次官・黒田清隆（一八四〇〜一九〇〇年）が「屯田兵設立建白書」を提出し、屯田兵制度の創設が決まりました。翌七（一八七四）年、黒田は参議兼開拓長官に任命され、屯田計画は実践へと動き出しました。

これらの一連の流れを見取図に重ね合わせてみると、一つの仮設が浮かび上がってきます。

北海道石狩州札幌地形見取図は、屯田兵制度導入を含む北海道開拓プランを推進するためのプレゼンテーション・ツールの一つだった。

明治六年と言えば、中央では征韓論をめぐる議論が沸騰する一方、維新後の大改革によって国家財政は逼迫していました。北海道では道路一本引くために、東本願寺の力を頼むほかなかったほどです。黒田は、征韓よりも樺太出兵論を唱え、なんとか明治政府の目を北方に向けさせようとしていた時期です。省庁間の政府予算の「ぶんどり合戦」は当時も今もあまり変わりがないとすれば、開拓使がこの年十月の本庁完成を前に、



本願寺道路開削の様を描いた現如上人
北海道巡教之図（明治4年4月）

（札幌市中央図書館所蔵）

開拓計画が日本にもたらす希望とその可能性を大いにアピールしようとしたに違いありません。この大胆な仮説に立つと、大自然をも凌駕するかのよう都市の未来図を際立たせ、躍動する水脈に農地開拓の可能性を象徴するかのよう描いた長善の「意図」が、この見取図から透けて見えてきます。一見してシュールにそしてポップに映るのは、見取図を手にした者に強烈なインパクトを与え、深く印象に残る効果を狙った結果とも言えます。

余白の「埋め草」とも見える三つの文章に目を向けると、それは「札幌賛歌」のようにも感じられます。「蝦夷風俗彙纂」（明治十五年）の編者・肥塚貴正こいづかたかまさによると思われる和歌の下の句は「かまどの煙立ち上るかな」と読めます。日本書紀にある仁徳天皇の故事になぞらえて都の繁栄を歌っているとも解釈でき、

多少やり過ぎのわざとらしさが臭うのは、広告宣伝部長ならぬ長善の上司の指示なのかも知れません。

そこまで勘ぐると、この見取図は、政府の財務官僚向けであると同時に、移民募集のパンフレットとしても活用する狙いがあったようにも感じられてなりません。

（記・梶田博昭）

【主な参考文献】
「北海道の歴史と文書」（北海道立文書館）、「船越長善『札幌近郊の墨絵』について」（工藤義衛・渡辺隆）、「北海道史人名字彙」（河野常吉）、「さっぽろ文庫」第7巻（札幌事始）第12巻（藻岩・円山）、「丸井今井九十年史」（丸井今井）、「札幌開府」（寒川光太郎）、「平岸村」（澤田誠一）

「札幌地形見取図」刊行前後の主な出来事

- 明治2 (1869) 年
 - 5月 箱館戦争終結（6月版籍奉還）
 - 6月 ロシア軍艦が樺太南部に基地建設
 - 7月 開拓使設置、鍋島直正を初代長官に任命
蝦夷地開拓志願者に土地割り渡しを布告
 - 8月 蝦夷地を北海道と改称、11国86郡を置く
 - 9月 最初の大量募集移民、根室・宗谷・樺太に約500人
 - 10月 開拓判官島義勇、銭函に仮役所設置
札幌本府区画に着手（3年1月に中止）
樺太視察した判官岡本監輔らが屯田兵配備を提言
移民の扶助規則策定
 - 11月 酒田県に農民男女300人の移住を要請
 - 12月
- 明治3 (1870) 年
 - 4月 募集移民約118戸394人が札幌周辺に入地
庚午一〜四ノ村（苗穂・丘珠・円山・札幌新村）開村
伊達邦重主従が有珠へ移住
開拓次官・黒田清隆、樺太訪問（全道の人口約10万人）
- 明治4 (1871) 年
 - 2月 黒田、米国学・ケプロン招聘
募集に応じた商人と職人40数戸が札幌に移住
辛未、月寒、花畔、生振、対雁、平岸村等に移民集落
白石、手稲村に官の保護を得た土族移住
札幌に開拓使庁、箱館・根室に出張所を置く
 - 5月 廃藩置県、桐野利秋少将、札幌に鎮台設置を上申
 - 7月 西郷隆盛が屯田兵設置を黒田らに建築
アイヌの開墾者に家屋・農具など給与
 - 10月 本願寺道路（有珠街道・札幌〜尾去別）開通
平岸街道（石山〜豊平）開削
札幌官園（試験場）設立、薄野遊郭設置
- 明治5 (1872) 年
 - 5月 今井藤七、札幌に小間物店開業
 - 9月 開拓使本庁舎着工（6年10月完成）
北海道土地売買規則・地所規則を制定
勸農規則定め移民団体・集落の維持を図る
- 明治6 (1873) 年
 - 1月 徴兵令施行
 - 3月 「北海道石狩州札幌地形見取図」刊行
 - 5月 熊石・福山・江差で暴動
 - 6月 札幌本道（亀田〜室蘭〜札幌）完成
開拓使東京出張所に屯田課設置（永山武四郎ら配属）
征韓論沸騰（黒田は樺太出兵論）
 - 8月 永山らが「屯田兵を創設する建言」提出
 - 12月 黒田が「屯田兵設立建白書」提出、制度創設が決定
- 明治7 (1874) 年
 - 8月 黒田を参議兼開拓長官に任命（6月陸軍中将兼務）
- 明治8 (1875) 年
 - 5月 樺太千島交換条約調印
最初の屯田兵198戸が琴似村に入地（翌年発寒にも）
「屯田憲兵例則」制定
 - 10月 樺太からアイヌを宗谷に移住（9年対雁にも）
- 明治9 (1876) 年
 - 山鼻村に屯田兵240戸入地
 - 8月 札幌農学校開校（5年東京に仮学校開設）
- 明治10 (1877) 年
 - 4月 屯田兵、西南戦争に出動（全道の人口78万6211人）